うに、すでに北陸方面にも自動車部品の会社が工場進出している状況です。その中で、交通インフラが増えてきた場合には、県を越え、地域を越えて連携する時代が来ると思いますから、中部地域の中に北陸圏を入れるか入れないかというよりも、経済面でも、観光の面でも、大いに連携が強まってくる時代であるし、またそうしていった方がよりよい時代になる。互恵の時代だと思います。

②成熟社会における中部の地域づくりについて

【小出氏】　中部の枠組みの問題を始めますと何時間あっても足らないくらいですので、このあたりで止めておきまして、林先生から先ほど出ました成熟社会の問題は少子高齢化が基本なのですけれども、中部地方に限らず時代の変化という感じがします。

私の取材体験をお話しますと、20年ほど前、少子化が言われていた当時、出生率が1.7の段階で長期連載をしたのですけれど、少子化は量で捉えられることが多いけれど質の変化も大事ではないかと感じて、「長男時代」という大連載をしました。あの頃から男という男は全部、長男になってしまったのですね。もともと日本社会を支えたのは、長男は田舎で親から田んぼをもらって、次男、三男が大都会に行って高度成長を支え、戦後の復興を支えてきた。活力の源はほとんど次男、三男の文化だったわけです。次男、三男は、生まれたとたん、お兄ちゃんというライバルがいるから、非常に活発だし、親が手をかける率、これは聖心女子大が調査をしていますが、母親が長男に手をかける率は次男、三男の6.2倍というデータがありました。これはおおむね写真の数に比例すると書いてありましたけれども、それくらいオーバーケアされたのが長男です。次男、三男は面倒を見てもらえなくて、自分が目立つように活発になったり、ぐれたり、勉強したり、いろいろなことをやるわけですけれど、それが日本社会の活力を生んだ。

その活力源である次男、三男が、恐竜のように絶滅しているのですね。長男ばかりになったわけです。6.2倍手をかけられる。これは物理的にそうなってしまうのですね。ぼくも長男なのですけれど、長男というのはぼうっとしているのが多い。そういう若者ばかりになった日本民族史上初めての時代なのですね。そういう質的な変化があります。先ほど林先生からも、給料が9%成長だとボーンと上がる。わかりやすく10%の経済成長だと、7年辛抱すれば倍になります。もし10%の金利の定期預金があれば、7年間で倍になるわけです。でも今、どんなにがんばっても2%でも難しいくらいですけれど、2%で成長すると、給料が倍になるためには35年かかるわけです。1%なら70年かかるわけです。だから7年は辛抱できたのですね。昔の青年は7年辛抱したら月給が倍になるといってがんばったら、本当に倍になった。でも今は、35年辛抱したら倍になるからがんばれといっても、ちょうど定年のときに倍になるくらいで、がんばる方がおかしいという時代です。そういう社会での地域づくりですね。

もう1つ、質の変化で重要なのは、親類がいなくなるのですね。限りなくひとりっ子で、ひとりっ子同士が結婚すると、その間にできた子供にはおじさん、おばさんがいないのです。当然、いとこもいないわけです。現在、日本社会から急速な勢いで親類ネットワークが消滅しているのですね。親類というのは体で覚える知識をいっぱい教えてくれるものですけれど、それがなくなっている。その代わりになるのは地域しかないと思います。

そのような観点から感じることが多々あるのですけれど、林先生、成熟社会と地域の問題、特に中部地域はどういう形がいいでしょうか。

【林氏】　私は20年ほど前に、イギリスのリーズに住んでいました。最近爆弾テロの実行犯がリーズ大学の化学の研究者だったというので有名になったところです。そこの失業率が、国全体が14%、北イングランドが28%というものすごい失業率でした。それから、年齢に応じて24歳以下くらいのところになると、その地域の倍くらいになるのです。つまり50～60%の失業率だったわけです。

しかし、彼らは生き長らえているわけですね。これはどうしてかなと思ったのですが、私が唯一編み出した答えは住宅ストックがきちんとしているからというものでした。つまり、お金を儲けた世代が次々とその場で、それこそ宵越しの銭は持たないみたいな格好で終わってしまった国と、住宅などのストックをきちんと蓄えていく。この地域は間違いなく先進国の中で最も繁栄しているわけです。日本の中で繁栄しているということは、先進国の中で繁栄しているわけですね。それをどうストックとして残すかということで、この写真にある埼玉県のマンションのようなことをやっていてはいけないわけです。

これは、80年頃に手前の7階建てのマンションができた。10年ちょっとしたら、ここにある2階建てのマンションが5m先にできた。これはさいたま市です。大反対していたのだけれど、入ってきた。入ってきた後、数年経ったら10m前に14階建ての計画が持ち上がって、真ん中の住民が訴訟を起こしました。つまり、自己中心的にマンションを建てて、自己中心的に入ってきた人がまた次の自己中心的な人を訴えているということですね。こういう切望的なことをやっていたのでは、いくら今の時代にこの地域が繁栄していても次の時代にはめちゃくちゃになるわけですね。

別に埼玉だけではなくて、名古屋の栄のすぐ横ですが、泉1丁目という所ですが、高い建物の後ろに2階建てがあったりするわけです。これは自己中心的な精神の固まりですね。自己中心をやめさせるような、あるいは自己中心をやめた方が得をするような仕組みを作らなければならない。例えば、自動車税のグリーン化のように、いいエンジンの車を買うとその方が安いという税制になってないから誰もしないわけでありまして、これも土地利用のグリーン化のようなことをきちんと仕組んでやっていただくべきだと思います。

右側の建物がめちゃくちゃになっています。220万人の人口を持つパリ市です。人口は名古屋の方が少し多い。ただ、パリの面積は名古屋の3分の1しかないのです。

これはきちんと作っているわけです。これが大体200年持っているわけです。200年街区です。パリの場合、ピカピカの建物ではないのだけれども、お互いに調和して生き残れるものができている。

日本は26年に1回建て替えています。マンションなど26年に1回建て替えています。

パリは200年です。経済成長が止まって成熟してきたときに、私たちはどちらの姿で行くかというと、中部こそがこういう回転に入っていくという模範になるべきではないか。中部ができなければ日本全体が絶望するわけですね。だから、中部が稼ぎ出しているお金をきちんとストックする。他の地域に貢献することも必要なのですが、中だけでもいい意味での節約型にしていく。これがどうしても必要なことであり、中部にこそできることではないかと思っています。

【小出氏】　全く同感でありまして、私も立場上、知事さんとか市長さんによくお会いするのですが、活気がなくて困っているとか活力はどうしたらいだろうという話が必ず出る。そのときに私が反論するのは、ヨーロッパの街を見て誰が活気を感じますか。活気があるかないかで見たら、ヨーロッパの街は全然ないのです。上海やシンガポールに行けば腐るほど活気がある。ヨーロッパにあるのは、静かな落ち着き、文化、奥行きです。世論調査をすると、上海に住みたいという日本人は圧倒的に少なくて、ヨーロッパの田舎町に住みたいという人が圧倒的に多い。

成熟社会は間口より奥行き、活気より落ち着きです。次男、三男より長男にはそういうものが好きなタイプが多い。そういう時代の流れだと思います。林先生のご指摘には非常に同感できる感じがします。

谷岡先生、成熟社会と中部地域という観点ではどうでしょうか。